教科書文庫
6
810
45-1949
0130449688

文部省検定済教科書

教育文化研究会編

國語

中学校
第二学年用

二

教育図書株式会社

昭和二十四年十月十日
文部省検定済
中学校國語科用

教科書文庫
6
810
45-1949
0130449688

國語

中学校
第二学年用

二

教育図書株式会社

広島大学図書
0130449688

中央図書館

広島大学図書
0130449688

目次

一 川えび……田中冬二…一
二 一ふさのぶどう……片岡良一…二
三 クラス雑誌……一三
四 技術をきたえる……成瀬政男…一六
五 野獣
一、白牙……ロンドン…二一
二、動物園……川路柳虹…二九
六 森の絵……寺田寅彦…三三
七 ペェアの旅……ストリンドベルグ…三六
〔当用漢字表〕

一 川えび

田中冬二

田中冬二（たなかふゆじ）、本名は吉之助（きちのすけ）。明治二十七年（一八九四）福島縣で生まれた。詩誌「四季」同人。詩集に「海の見える石段」・「花冷え」・「菽麦集（しゆくばくしゆう）」などがある。詩風は清純温雅なものである。

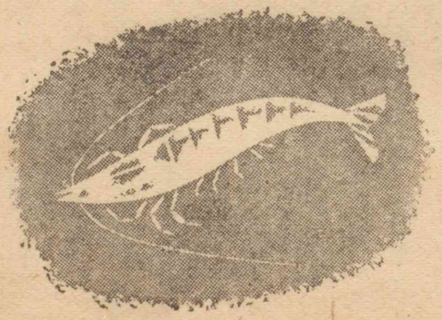
静かな澄んだ秋の夜だった。

はおりをかさねたいくらい薄寒かった。

山の牧場から馬が帰って來たので、家人たちの心はなんとなくはれやかであった。

それは鹿毛（かげ）の二歳馬で、千早（ちはや）とよばれていた。木の根っこや下枝で足を折ったり、岩かどで傷したり、がけから落ちたり、昔のことだが、くまに襲われたりするからである。それが無事に帰って來たのである。

新しく屋根をふきかえたうまやの方でにぎやかな笑い声がした。



復習にあいた少女は、ふとガラスばちの川えびを顧みた。そしてひとり心が重かった。

薄あいをおびた半透明の川えびはもう弱っていた。

かわいそうに、早く放してやったら。けれど、そうしたら弟はどんなにおこるだろうと思い、少女はまゆをしかめた。

暗い勉強室の電燈のもと、ガラスばちの中、川えびは初冬のみぞれの花よりもわびしかった。

（「むらさき」による）

【学習の手引】

(1)川えびのわびしさが、どんなふうで表わされているか、考える。
(2)詩の題材の中心と、その背景について考える。
(3)いかにも秋だと感じた景をとらえて、詩を作る。
(4)ほかにも秋の詩をさがして、秋の詩集を作る。

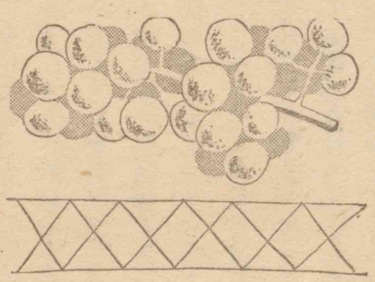
二一　ふさのぶどう

片岡良一

この課では、特に、文学作品の学習のしかたについて、この一つの研究を中心にして考えたい。

片岡良一は、明治三十年（一八九七）神奈川縣で生まれた。近代文学の研究者。また評論家で、著書に、「現代作家論叢」・「近代日本の作家と作品」・「近代日本文学展望」などがある。

有島武郎　小説家。明治十一年（一八七八）に生まれ、大正十二年（一九二三）に没す。



一

「一ふさのぶどう」は、大正時代の有名な作家、有島武郎の代表作です。

横浜の山手の学校に通っているひとりの氣の弱い少年があります。学校の行き帰りに見る海岸のけしきを、なんとかして見たとおりの美しさに描き上げたいと思うのですが、「透きとおるような海のあい色と、白い帆前船などの水ぎわ近くにぬってある洋紅色と」が、彼の持っている絵の具ではどうしてもうまく出ません。ところが同級生のジムという少年が、外國から輸入された上等の絵の具を持っていて、その中のあいと洋紅とが、特別美しいのです。少年はそれがほしくてたまらなくなりました。が、氣の弱いために、それと同じ絵の具を買ってくれとおとうさんに頼むことができません。それでもほしくてたまらないので、とう〳〵その二色の絵の具を盗んでしまいました。

しかし少年の盗みは、すぐ知れてしまいました。彼は、ジムの外、おゝぜいの同級生たちに手あらく調べられました。いろ〳〵でたらめな答をしたり、抵抗したりしたのですがおゝぜいにはかないません。ポケットにかくしておいた絵の具を引き出されてしまった上、むりに先生の所へ引きずって行かれました。それは少年の大好きな女の先生でした。

同級生の代表が少年のしたことを詳しく先生に言いつけました。少し顔をくもらせた先生は、「それはほんとうですか。」と聞きました。少年はこの先生をごまかそうとは思いませんでした。けれど

も、自分が「そんなことをするいやなやつ」だということを、先生に知られるのがつらかったので、ほんとうだと答える代わりに泣き出してしまいました。

　しばらく默って少年を見つめていた先生は、やがて他の少年たちをみな帰してしまいました。そうして少年の肩を抱くようにしながら、「絵の具はもう返しましたか。」と尋ねました。少年は「深々とうなずき」ました。

「あなたは自分のしたことをいやなことだったと思っていますか。」

　先生はもう一度靜かに聞きました。少年はもうこらえきれず、激しく泣きじゃくりました。先生に肩を抱かれたまゝ「死んでしまいたいような心持」になりました。

　それきり、もう先生は少年をしかりませんでした。「よくわかったらそれでいいから、泣くのをやめましょう。」そう言った先生は、へやの窓の所まではい上がっているぶどうのつるから、一ふさの西洋ぶどうをもぎ取って、それを少年のひざの上に置きました。そうして次の時間の授業のために、靜かにへやを出て行きました。少年には、授業を終って帰るまで、靜かに待っているようにとだけ言い殘して——

　ひとりになると、少年は、「さびしくってさびしくってしょうがないほど悲しくなりました。」好きな先生を心配させたことを思うと、「ほんとうに悪いことをしてしまったと思いました。ぶどうなどとても食べる氣になれないで、いつまでも泣いていました。」

が、そのうちにたぶん泣きつかれてしまったのでしょう。そのまゝ眠ってしまった少年は、先生にそっとゆり起されました。先生はにこ〳〵しています。眠って氣分の軽くなった少年も、そのえ顔を見て、恥ずかしそうに笑いかけましたが、すぐに悲しいことを思い出して、また暗い顔になりました。先生はやさしくそれをなぐさめて、少年を家に帰しました。たゞその時、

「あすはどんなことがあっても学校に來なければいけませんよ。あなたの顔を見ないと私は悲しく思いますよ。きっとですよ。」

　ということだけを強く、念を押すように言いました。そうして、少年のかばんの中に、それまで食べずにいたぶどうのふさを入れてくれたのです。

　少年は、家に帰ってからそのぶどうを「おいしく」食べました。

　しかし、翌日になると、少年はなか〳〵学校に行く氣になれませんでした。お腹が痛くなればいいと思ったり、頭痛がすればいいと思ったりしたのです。けれど、どこも悪くなりません。しかたなしに家は出ましたが、どうしても学校の門をはいることができないように思われるのです。

けれども、先生の別れの時のことばを思い出すと、行かずにはいられません。行かなければ先生はきっと悲しく思われるだろう、そう思って少年は思いきって学校の門をくゞりました。

するとどうでしょう、まず第一にジムが飛んで來て少年の手を取りました。だれも「どろぼうが來た」などと悪口を言う者もありません。少年はなんだか、きみが悪いような氣持になりながら、ジムといっしょに先生の所に行きました。

　先生はまずジムをほめました。そうして、これからふたりがよい友だちになるようにと、ふたりに握手をさせました。

　少年は、自分の悪かったことをあやまりもしないで、こんなふうにされるのは、なんだか自分の方

がかってすぎるように感じましたので、もじ〱していましたが、ジムはいそ〱と少年の手を引っ張って、かたく握りました。少年はうれしくてたまらなくなりました。が、前からの関係がありますので、まだいくらか恥ずかしく思いながら、やっぱりにこ〱しました。ジムはもういかにも氣持のよさそうに、にこ〱しています。

　このようすを見ていた先生もにこ〱していましたが、やがてまた例のぶどうを一ふさもぎ取り、それをまん中から二つに切って、ジムと少年とにくれました。少年は、その時、先生のまっ白いてのひらに、紫色のぶどうのつぶが重なってのっていたその美しさを、いつまでも忘れることができませんでした。そうして彼は、その時から、前よりもよい子になり、少し「はにかみや」でなくなりました。

二

「一ふさのぶどう」はだいたいこういうことを書いた作品です。いうまでもなく、先生のやさしい愛が、主人公の少年を、「はにかみや」でない、「よい子」にしたことを主として書いたものです。それを少しむずかしいことばで言えば、「愛の力」がこの童話の主題であり、美しくておいしい「一ふさのぶどう」は、その愛の美しさを表わすものになるわけです。

　そういう言い方はむずかしくても、先生の愛の力が、少年を「よい子」にしたことは、だれにもすぐわかるでしょう。初めジムやその他の同級生たちが、主人公の少年をきびしく問いつめたり、責めたりしていた時には、少年も、彼らに反抗したり、ごまかそうとしたりしていたのが、先生にやさしくいたわられると、もうすぐすなおな正直な心になって、悪いことをしてしまったことを後悔しているのですから。つまり、おどかしや、單なるきびしさだけではできなかったことを、やさしい愛情がりっぱにしとげているのです。そういう愛の不思議な感化力が、この作品には、わかりやすく書かれていると思われるのです。

　が、もう一つの方の、少年が「少しはにかみやでなくなった。」ということは、いくらかわかりにくいかもしれません。そういう人は、その外にはほとんど何一つきびしいことを言わなかった先生が、少年に「あすは必ず学校に來るように。」ということだけを、強く念を押すように言っているところに、注意してください。

　先生は氣の弱い少年が、あすになると学校を休みたくなるのを、よく知っていたのです。それで、強く念をおしたのですが、少年は果たして学校に行くのがいやになりました。が、先生のことばがありますので、いや〱ながらがまんして学校に行ったのです。ジムはどんな顔をするだろう、外の同級生たちはどんな惡口を言うだろう、恥ずかしいな——少年はそんなふうに考えて、内心びく〱していたに違いありません。

　ところが、じっさいは、それが意外な結果になったので、すっかりうれしくなったのですが、この経驗から、少年は、恥ずかしいめに会わされはしまいかと思って、とかくしりごみしたがる氣持を押しきって、強く生きることを学んだのです。そうして、強く生きてみれば——ぶつかってみれば、人生というものはぞんがい、こわくもきびしすぎもしないものであるということを知ったのです。よわむしで神経質な「はにかみや」であった少年は、そういうことを発見して、前ほど神経質でも「はにかみや」でもない、強い人間になれたわけなのです。つまり、それだけきたえられたのです。

その点がわかると、愛というものは、たゞやさしいだけのものではない、人をきたえあげる强さやきびしさをふくむものであることが、自然にわかるでしょう。学校に必ず來るようにと、强く念を押した先生には、そういうきびしさもあったのです。それがあったからこそ、少年は强くなるようにきたえられたのです。こういうきびしさがないと、愛は人をきたえるどころか、かえって、わがまゝなあまったれの人間を作ってしまいます。

しかし、愛をそういう危險なものにしないためには、きびしさだけでもいけません。きびしさだけだと、相手をかえって反抗的にさせたり、いくじなくいじけさせたりしてしまう危險も多いのです。わがまゝな、あまったれを作らないと同時に、そういう反抗やいじけた弱さを持たせないようにするためには、愛は、そのきびしさの中に、相手の立ち場や心持をよく理解し、その人とその場合とに應じた適當なくふうを持つことが必要なのです。そういういたわりと察し、こまやかな心づかいを持って、主人公の少年をきたえてゆくありさまが、「一ふさのぶどう」には、いき〳〵と描き出されています。それが、この作品のねうちの一つになっているのです。

三

それからもう一つ、以上のような力となかみとを持つ愛が、相手を尊敬するという心の上に立っているものであることを、見落してはなりません。罪やあやまちをおかしても、いきなりその人を、惡いやつだとか、つまらぬ人間だとかいうように決めてしまわない、つまり、人間というものをばかにしないのです。「一ふさのぶどう」の先生が、主人公の少年に、できるだけ恥ずかしい思いをさせまいとしていることは、前のすじがきからだけでもわかるでしょう。先生が、外の少年たちをみな、先生のへやから出してしまったところなど、特にそういうことを強く感じさせます。作品には書かれていませんが、少年をひとりへやに殘して行った先生は、少年のいない教室で、おゝぜいの生徒たちに、たぶんそういうことについて話したのでしょう。だから、ジムも、同級生たちも、少年の惡口を言ったり、恥ずかしがらせたりしなかったのだろうと思います。そういう扱い方が、かえって少年に、自分の惡かったことを強く感じさせ、よい子に立ち直らせたのだと思います。これが、もし反對に、ジムや多くの同級生たちが、少年をいつまでも冷たい目で見たり、のゝしったり、こそ〳〵と惡口ばかり言っていたりしたら、どうでしょう。

と同時に、このことは、一方、愛されるものの方にも、そういう人のあたゝかい心に答えるすなおさと同時に、恥を知る心持がなければいけないことを、はっきりと感じさせましょう。「一ふさのぶどう」の主人公は、白いてのひらに重なっているぶどうを、限りなく美しく感じたり、ジムのえ顔を、心からうれしく思ったりする、すなおな少年なのです。そういうすなおさがあったからこそ、少年は、この苦しくて、しかもうれしかった經驗を生かして、「よい子」にもなれば、少し「はにかみや」でもなくなれたのです。その意味では、この「一ふさのぶどう」は、先生の愛と少年のすなおな心とが一つになって、美しい世界を作り出したことを書いた、そういう作品だということにもなります。

四

「一ふさのぶどう」は、以上のように、すぐれた点の多い、有島武郎の童話なのですが、この主人公については、もう少し考えてみなければなりません。

少年は、べつだん、びんぼうな、ほしい繪の具の買ってもらえないような家の子どもではないので

す。たゞ氣が弱くて、おとうさんにそれをせびることができないのです。けれども、それをほしがる氣持をおさえることもできない、そこでふら〳〵と――ひとの絵の具を取ってしまうのです。作者は、どうしてこういう氣の弱い少年を描いたのでしょうか。

文学というものは、たとえば災難や不幸が続けば、悲しいことを書いた作品がはやるというように、その時代と非常に関係のあるものなのです。

大正十年（一九二一）

「一ふさのぶどう」の書かれた大正十年ごろからそののちの時代にかけては、特別な一部の人々が、だん〳〵力を持ちはじめて、一般の人々は、自分の考えや意志にしたがって自由に生きるということがだん〳〵できないようになりはじめていました。と同時に、いろ〳〵の思想が起ってきたので、よほどしっかりした人でないと、あちらこちらへふら〳〵と動かされやすいというようなことにもなったのです。そういう人間が多い時代だったので、よわむしの神経質の、ものに動かされやすい人間が、おとなの読む作品から子どもの読む童話の中にまで、たび〳〵現われるようになって、それが多くの人たちに喜ばれるということになったのです。

つまり「一ふさのぶどう」の作られた時代には、日本の國に、多くの人々を、氣の弱い神経質な、ものに動かされやすい人間にしてしまわずにはおかぬような、おもしろくない原因があったのです。ですから、いろ〳〵な作品にも、自然にそういう人のことが多く書かれるようになる。それを、その当時の氣の弱くなっていた人たちは、自分自身の友だちのことが書かれているように思って、自然と、親しさを感じるようになったのです。

ですから、「一ふさのぶどう」は、たいへん評判がよかったと同時に、すぐれたところの多い作品であるにかゝわらず、今のみなさんは、それほどおもしろく感じないかもしれない――少なくともこの少年主人公は、あまり好きになれない、氣が弱すぎて子どもらしいむじゃきさや強いところがなくていやだ、そんなふうに考える人が多いのではないかと思います。

なぜといって、今は大正十年ごろとは、すっかり時代が変わっているからです。みなさんは、もっと強い、もっと強情な、もっとさっぱりした、からっと明かるい、もっとでたらめであっても健康な、そんな少年の方に、よけい心をひかれるに違いありません。ですから、今日の健康な人間の感じ方からは、少し離れている作品だということにもなるのです。

この点については、もっとお話したいのですが、長くなりますので、このへんで筆をおきましょう。とにかく、いろ〳〵問題もありますが、同時に、文学作品としてすぐれた点も多いし、今でもなお生きた教訓を含んでいるし、またいつまでもそういう生命を持ち続ける作品だと思います。そういう意味で、作者有島武郎と、その作品「一ふさのぶどう」に愛と敬意をさゝげたいものです。

（「子供の廣場」による）

【学習の手引】

(1)この文に出てくる少年について話しあう。
(2)一作品の研究に当たって、どんなことについて調べ、考えてあるか、まとめる。
(3)この(2)でまとめたことを中心にして、文学作品の研究のしかたについて考える。
(4)他の作品を選び、この課で学びえたことによって研究する。

三 クラス雑誌

クラス雑誌を作りましょう。この樂しい仕事をする間に、さま〴〵の國語の勉強ができ、いろ〳〵の力がついていきます。

クラス雑誌といっても、たとえば学校の一つのクラスだけで出す狭い意味のクラス雑誌もあり、学校全体で出す校友会雑誌(スクール－マガジン)もあり、また氣の合ったものが寄り集まって出す同人雑誌もあるわけです。こゝではそういうもの全部をひっくるめてお話しましょう。

スクール－マガジンは外國でもたいへん盛んになってきました。だれでも自分の書いたものが活字になったり、自分のことが記事になったりするとうれしいもので、これはどこの國でも同じことです。スミスのむすこはタッチ－フットボールのキャプテンで冬のシーズンに大活躍をしたとか、ブラウンの娘は春の音樂会で「トラビアタ」をみごとにうたいのけたというような記事が出ると、親たちも喜びます。外國では生徒たちがみずから編集者となって、自分たちの雑誌を自分たちで作っています。われわれもひとつ作ってみようではありませんか。

トラビアタ　ヴェルディ作曲の歌劇「椿姫」の主題歌。

地方新聞は、その地方の生活のありさまを描き出し、その地方の活動を助けるものです。その地方の人々に氣にいるように、できるだけ人目をひく(アトラクティヴな)記事を集めなければなりません。スクール－マガジンも同じことです。地方新聞は利益を得るために作られ、スクール－マガジンは生徒が樂しめるために作られる違いがありますが、両方とも費用ということをよく考えてやらねばなりません。

いよ〳〵雑誌を作ることに決まったら、まず発行部数を決める必要があります。これは生徒の数や先輩の数によって決まります。発行部数が決まったら、こんどは雑誌の大きさとページ数を決めて、印刷所に相談してみます。印刷所は商賣ですから損をしないように費用を計算しますが、喜んでわれわれの計画を助けてくれるでしょう。

さて、費用が決まったら、いよ〳〵雑誌の作成にとりかゝりましょう。

(1) 編集部員を選ぶこと

新聞や雑誌の編集部員のことをスタッフとよんでいます。われ〳〵もまずスタッフを選ぶ必要があります。もちろん学校の先生や先輩たちがスタッフのひとりになることもあるでしょうが、ほんとうの仕事をやるのはやっぱり自分たちでやった方がずっとおもしろいものです。仕事はたくさんあるので、それ〴〵分担でやらねばとても手がまわりません。しかしスタッフをあまりたくさん選ぶことはかえって仕事がやりにくくなるものです。学校全体の雑誌だったら各学年からひとりずつぐらいがいちばんいいでしょう。またこの編集ということは非常にむずかしい仕事なので、特に腕ききを選ぶ必要があります。

(2) 編集会議と原稿集め

原稿を集める前に編集会議を開きます。編集会議には編集部員はもちろんのこと、先生がたや先輩たちが加わることもあるでしょう。この会議で、どんなものを雑誌に載せるかということを決めます。

小説や詩や旅行記を一般生徒から募集して、その中のいいものを選ぶのもこの編集会議で決めるわけです。また運動部のキャプテンにそのシーズンの記事を書かせるとか、先輩たちからの特報を集めるとか、いろんな計画を立てます。学校の雑誌であるから学校以外の社会の記事を集めることはつゝしまねばなりません。また上級生におもしろくないという理由で、一年生向きの笑話を排斥するのもいけません。下級生が編集部員に加わっているのだから、かえって下級生を力づけてやるようにしむける必要があります。それからもう一つ注意すべきことは、人の悪口を書いたり、ひにくったりするような記事はようしゃなく「没」にすることです。学校で恥をかいたことは一生その人の心の傷となるものです。

(3) 割りつけ

さて、原稿が全部そろい、どれとどれを雑誌に載せるかということが決まったら、次に割りつけをやります。割りつけというのは雑誌のていさいを指定することです。まず記事の順序を決定します。この順序は雑誌全体の調子にいちばん影響の大きいものですから、すぐれた感覚を必要とします。運動部や團体の雑報をいちばん初めに持ってきたり、しっかりした論文をいちばん終りに持っていったりするへまは避けましょう。また読む人がたいくつしないように笑話やおもしろい学校のニュースをていさいよく配置することも肝心です。

記事の順序が決まったら組見本というものを作ります。何号活字で、何行何字づめ何段組みというのを指定し、見出しは何行取りにするか、カットはどこへ入れるかなどということを書きこみます。割りつけ担当者は活字の字体と大きさをよくのみこんでおく。本文に使われる活字は五号・九ポ・八

ポはポイントの略。一ポイントは〇・三五一四ミリ。

ゲラ刷り　組版したものをゲラという木製の箱に移して刷ったもの。

活字見本

	初号	36ポ	1号	24ポ	2号	3号	4号	5号	9ポ	8ポ	6号	7号
明朝	文	化	日	本	文	化	日	本	文	化	日	本
ゴチック	文	化	日	本	文	化	日	本	文	化	日	

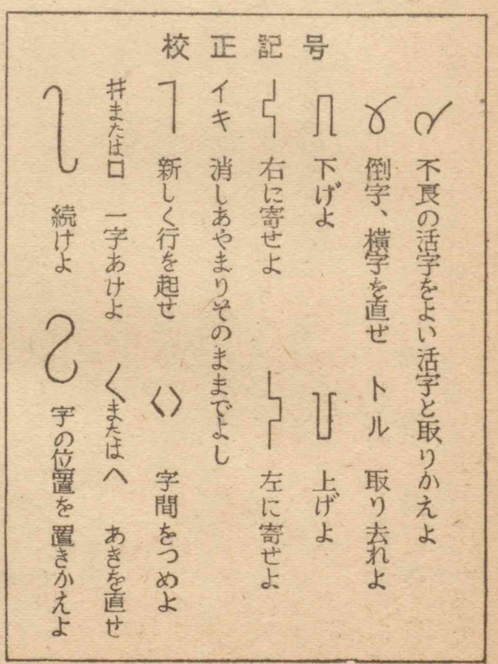
ポ・六号といったところでしょう。

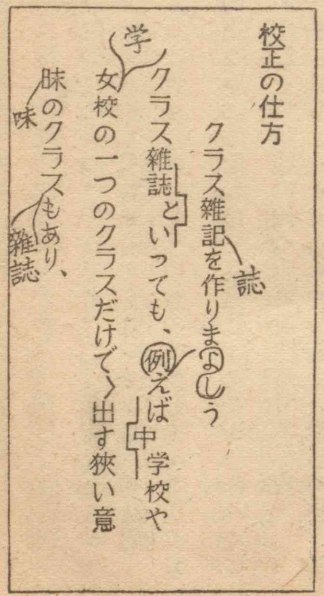
こうして一つの記事に一つの組み見本をつけて印刷所へまわすのです。

(4) 校　正

印刷所から校正刷り（ゲラ刷り）が出たら校正をします。最初の校正を初校といいますが、これを原稿と読みあわせてまちがいを訂正するのです。校正記号は下記の通りです。

編集者はうめくさをいつも用意しておきます。うめくさというのはペー





ジの終りに余白があった場合にそれをうめる記事のことです。笑話とかニュースが適当でしょう。

割りつけのエキスパートは雑誌の大きさと同じひな型を白紙で作っておきます。そして校正刷りが出て來たら一組切りとって、自分の思うようにこの白紙にはりつけるのです。これで余白のあるところはうめくさでうめることもできるし、散文と詩とさし絵との配置の悪いところをうまくあんばいすることもできます。

エキスパート　熟練家、専門家。こゝでは係りの者。

こういう工作は初校の時に全部やっておいて、再校の時には見落した誤植を訂正するくらいにしないと雑誌の発行が遅れます。発行日を早くするということが雑誌の持つ重要な性格ですから。

再校の時でも三校の時でもいいですから、これで校正はもういいという時校了にします。校了になると印刷所はいよ〳〵本刷りにかゝるのですが、あとはでき上がるまで印刷所に任せておいていいわけです。

（「世界の子供」による）

【学習の手引】

(1)クラス雑誌の作り方の要領をまとめる。
(2)クラス雑誌として、どういうのがよいか、いろ〳〵の点について自分の考えを書く。
(3)クラス雑誌を作る。
(4)クラス雑誌を作る時、その計画の初めから、終りまでの記録を書く。

四　技術をきたえる

成瀬政男

成瀬(なるせ)政男(まさお)は、明治三十一年（一八九八）千葉縣で生まれた。工学博士。東北大学教授。歯車研究と技術で世界的にその名を知られている。

チューリッヒの工科大学の工作機械の先生、ギュギュレル教授に教えを請いに行ったのは、今にも雪の降ってきそうな、寒い日でありました。私はギュギュレル先生に会いました。そうして、頭を下げまして、「あなたの國は三百万の人口で精密機械についてはこれだけ世界第一の名声を得ております。これにはきっと原因がありましょう。その原因を私に知らせてください。」と申しました。

チューリッヒ　スイスにある市の名。

ギュギュレル先生は、五十六、七とお見かけしましたが、非常にしんせつに引見してくれまして、それには三つの原因を数えることができると言ってだいたい次のように語られました。

「一つは私の國の國情である。」と申すのであります。「スイスの國はアルプスの連山に囲まれて耕すべきなんらの土地も持たない。しかもその周囲にはドイツ・フランス・イタリア等の工業國がとり囲んでいる。海を越えてはイギリス・アメリカの國もひかえている。これらすべての工業國を周囲にひかえていては、それらの工業國が、どうしても及ばないようなものを造らなくては、われ〳〵のものを買ってはくれない。それゆえスイスではマーグ歯車のように世界のどこの國にも負けないような最上の歯車を造り、あるいはまた、ゼネボアのジグーボーラーのように世界中どこの國でもまねのできない精度のよい機械を造るのです。あるいはまたシタルーラジアルーボールーマシーネとか、シタルードレーマシーネのような全く新しいものを造るのです。そうしてこれらをすべて外國に輸出する。そういろ〳〵に工夫して、いつまでも一歩か二歩、世界の工業より進んでいるようにしなければ、スイスのよ

マーグ歯車　マーグ会社の歯車研磨所で、仕上げた歯車。

ゼネボア　会社の名。

ジグーボーラー　丸い穴を精密にあける機械の一種。

うな山國では國をたててはゆけないのであります。これが第一の原因であります。」
「第二の原因は工科大学が偉いのだ。」とこう言いました。私はその自信に敬意を表したのであります。ギュギュレル先生は話を続けます。「私の國ではひとりの教授の席があきますとスイス國全体をみて、世界一流の偉い人を工科大学の教授として招きます。地位にいとめをつけません。金にもちろんいとめをつけません。もしもスイスの國内に人がいなかったならば、世界各國を見て、世界でいちばん偉い人を連れてくる。それゆえにドイツで生まれたアインシュタイン教授はこゝの工科大学の先生でありました。テン＝ボッシュ教授はオランダ人ですが、いま、機械設計の先生をしております。ロッシュ教授はセルビア人ですが材料強弱の先生です。こういうふうに世界でいちばん偉い人を物心両面の優遇をもって招くのです。よく遇するところに人物が集まり、悪い待遇のところにはそれに相当する人物のみ殘ります。何事も人物です。この偉い人たちから教えられる学生が、また偉くなって、次々にスイスの工業を発展させてゆくことになるのであります。これが第二の原因であります。」
「第三はなんでありましょうか。」これは技術の血だというのであります。ギュギュレル先生は「やはり血なんです。」と、言いました。この簡單なことばが、強くいまだに私の耳に殘っております。ギュギュレル先生の話を要約すれば、「すべて血なのです。私の國には、技術の血というものが存在していて、三代とか四代とかいうように代々職工であるという家柄があります。そういう職工の家庭からはいつも子どもが工場に出る。工場ではこれに嚴格な技術を授けるとともに、これにあらゆる必要な学理の教育を施す。物理・化学・数学・図画・材料学などの工業教育を授けます。
　これが終って二十歳ぐらいになりますと、國中を遍歴する行脚（ぎゃ）の旅にのぼらせます。若い工員は、

シタル　会社の名。
ラジアルーボールーマシーネ　丸い穴を精密にあける機械の一種。
ドレーーマシーネ　みぞや曲線などの形のものを造る精密な機械の一種。

あっちの工場に一、二箇月、こっちの工場に二、三箇月とぐる〳〵工場をまわりまして自分の育った工場ばかりではなく、それ以外のよい工場の技術を見習います。職工は次第にその腕にみがきをかけ、人物もでき、再び自分の工場へ帰って來ます。これから國家試験を受けまして、こゝにはじめてマイスター（親方）となって一人まえの職工になるのであります。自分の腕に誇りを感じつゝ、その仕事に従事するのは、これ以後のことであります。
　そういう次第でありますから、この職工たちは職工の服装をしていることに誇りを感じるのであります。つまりなっぱ服を着ていることが、彼らの最大の誇りであります。背廣服を着ているよりもなっぱ服を着ていることが無上の光栄であると、一人も思いまた自分も思っております。そういうふうに職工が、國家に必要な技術の実際を背負って立っておると自覚し、また國家もそう考えております。したがって、こういう人たちは戰爭に出なくともよい。いや、出なくてもよいではない、出てはいけない。この者だけは殺してはいけない。國家の宝の血をからしてはいけない。」こういうふうにギュギュレル先生は言いました。
　ドイツでは工場の内部はめったに見ることができませんでした。スイスはこれに反してどの工場も見られました。私は見ようと思って見られない工場はありませんでした。「すべてのものが血である。」というギュギュレル教授のことばと、「どの工場も見ることができた。」こういうことばの間には一つのことばがぬけていると思ひます。何がぬけているか、「私の國の技術には血がないのでどこの工場を見てもその眞髄は持ち帰れない。」こういうことばでありましょう。したがってこのぬけているとこ

ろを補うと意味がはっきりします。「すべてのものが血なんです。私の國にはこの技術の血がないのでどこの工場を見てもその眞髄は持ち帰ることができない。したがって私はどの工場も見ることができた。」こういうことではないでしょうか。

帰り道に雪が降ってきました。私は宿のエデン＝ホテルに帰る寒い電車の中で、今聞いて來たギュレル先生の長い話と、自分の國の技術とを比較してみて、次第に暗い氣持になってゆくことをおさえることができませんでした。

われ〳〵はなっぱ服を着ていることを誇りに思っているか、どうか。自分の技術を三代も四代にもわたって、孫や子にも傳えるという工員があるか、どうか。私は工場をまわるとき、よく職工長あたりから頼まれます。「成瀬さん、私の子どもをあなたのでしにして技師にしたてて下さい。」私はこれに答えて、「あなたは職工長ではありませんか、あなたの子も工員にしませんか。」すると職工長は、「いや、この商賣は孫子の代までもさせたくはない。」

自分の子どもは技師にしたい、だから大学の工学部へ入れて、あなたのでしにしたいという、これが職工長の話です。それを三代、四代の技術の血が続いておるスイスと比較した時に、いったい日本の工業というものが、のぼりうるかどうか。私はこんなように考えてみてさびしい心持をもって、そののち、ドーバー海峡を渡り、イギリスに参りました。

（「日本技術の母胎」による）

【学習の手引】

(1) ギュギュレル先生の話の要点を、三箇條にまとめる。

(2) 帰りに暗い氣持になったのは、どんなことに氣づいたからか、考える。

(3) なんのためにこの文を書いたと思うか、作者の考えをつかむ。

(4) この課は「日本技術の母胎」の一部分であるが、この書名と、この課とからみて、どんな内容の本であるか、考える。

五　野　獸

人間や自然の世界とともに、動物の世界も考えてみよう。それはまた、別の方から、人間の世界を知ることになるのである。

一、白牙（ホワイトファング）　ロンドン

ジャック＝ロンドン（Jack London）（一八七六―一九一六）は、大学を中途退学して水夫となり、世界の各地に渡ったり、社会問題研究のため、アメリカ・カナダを旅してまわったりした。「白牙」（White Fang. 1905）は、荒野（こうや）に生まれたおゝかみの一生を書いたものであるが、世界文学中、最もすぐれた動物小説とされている。これは、その終りに近い一部分である。

月日が來ては、去った。南國には、食物が豊かにあり、白牙は太り、りっぱになり、幸福であった。彼は地理的に南國にいたばかりでなく、また、生活上も南國にいた。人間のしんせつが、太陽のように彼を照らし、彼はよく肥えた土地に植えられた花のように栄えた。

それでも、彼は他の犬たちとは幾分違っていた。彼は、他の生活を知らぬ犬たちよりは、法をいっ

リブ＝リブ　白牙をいじめた强い犬の名。

コリー　羊の番犬の名。

そうよく知っていたので、その法をいっそう、きちょうめんに守ったが、やはり、まだ、荒野が彼の中に去りかねて残り、彼の身うちのおおかみが單に眠っているにすぎないかのように、彼には、どことなしにどうもうさが潜んでいることを思わせるところがあった。

彼は、他の犬たちとは決してなかよくしなかった。彼の同類に関する限りでは、彼は孤独で暮らしてきたし、これからも孤独で暮らすつもりでいた。リブ＝リブと子犬の群れとの迫害を受けた子おゝかみ時代に、彼は犬に対してぬくことのできぬけんおをいだくようになってしまった。彼の生活の自然の進路がそらされ、彼は、同類からしりごみして、人間にすがりついた。

そのうえ、すべての南國犬は彼を疑いの目で見ていた。彼は、彼らの心に、荒野に対する本能的な恐れを起させ、彼らは、常に、うなり声と怒号と好戰的な憎しみとで彼を迎えた。彼は、それに反して、彼らに、歯を用いる必要はないことを知った。きばをむき、くちびるをよじ曲げただけで、例外なしにきゝめがあり、それによって、ほえながらとっかんして來る犬が、たちまちすわりこんでしまわないことは、まれだったからだ。

しかし、白牙の生活には一つの苦労があった。——それは、コリーであった。彼女は一瞬間の平和をも彼に與えなかった。彼女は、彼ほどには法に從順ではなかった。彼女は、彼女と白牙とをなかよしにしようとする主人のすべての努力を無視した。常に彼の耳には、彼女の鋭い、神経質なうなり声が

鳴り響いていた。彼女は、彼のにわとり殺し事件を決して許さず、彼のしようとすることは皆惡いという信念を固持した。彼女は、彼がまだ行爲をしないうちから有罪と認め、それに從って彼を扱った。彼女は、うまやのまわりや、屋敷中を、巡査のように、彼のあとをつけて歩きまわり、彼がはとやにわとりを好奇心を持って見ただけでも、憤慨し怒号するのであった。彼女を無視する、彼のお得意の方法は、前足に頭をのせて寢て、眠ったふりをすることであった。これは常に彼女をぼう然とさせ、彼女を默らせた。

コリーは例外として、その他すべてのことが、白牙には順調であった。彼は制御と平衡とを学び、法を知った。彼は落ち着きと、靜穩と、瞑想的な寛容とをわがものとした。彼は、もはや敵対する環境の中には住んでいなかった。危險とけがと死とは、彼の身のまわりのどこにも潜んではいなかった。やがて、常に迫っている恐怖と威嚇であった未知のものは、消え去った。生はやさしく安易になった。それはなめらかに流れ、その途上には、恐怖すべきものも敵も潜んではいなかった。

彼は、自分では氣がつかなかったが、雪のないのをもの足りなく感じていた。それについて考えたとすれば、「むやみに長い夏だなあ。」と思ったくらいのことだろう。事實、彼はぼんやりと、潜在意識的に、雪のないのをさびしがっただけであった。同樣に、太陽に悩まされる夏の盛りには、特に、彼は北國へのかすかなあこがれを経驗した。しかし、そのことが彼に及ぼした唯一の結果は、彼自身どうしたのかわからなくて、なんとはなしに不安で、落ち着きを失うということであった。

白牙は、決して、思っていることを色に表わさなかった。身をすり寄せることと、愛情を表わすうなり声の中へ例の低い調子を入れること以外には、彼の愛情を表わす方法はなかった。しかし、彼は

神　人間のこと。犬にとっての人間は、人間にとっての神と同じである。

第三の方法を見つける性向を持っていた。彼は、神の笑いには、常に敏感であった。笑いは、彼を狂わんばかりに激怒させた。しかし、彼は、愛の主人に対して怒る氣にはならなかった。それで、その神が、人のよさそうな、ひやかすようなふうに彼を笑うと、彼は当惑してしまった。彼は心の底からわき上がってくる昔の怒りの針やいばらを感じたが、それは愛情とたゝかったのである。彼は怒ることはできなかったが、何かをせずにはいられなかった。最初は、彼がつんとすましていた。それを見ると、主人はいっそうひどく笑った。それから、彼はもっとすましていようとした。すると、主人は前よりももっとひどく笑いこけた。ついに、主人は白牙の威嚴を全く笑殺してしまった。白牙のあごはかすかに開き、くちびるは少し上がり、じょうだんというよりはむしろ愛情といった方がよい妙な表情が、彼の目に現われてきた。彼は笑うことを覚えたのだ。

同様に、彼は主人とふざけることを覚えて、倒れてころがり、数限りのない手荒ないたずらのぎせいとなった。その返礼に、彼は、おこったふりをして、毛をさか立てて、どうもうにうなり、外観はどう見ても恐ろしい目的を持っているように見えるかみつき方で、歯をカチ〳〵鳴らすのだった。しかし、彼は決してわれを忘れるようなことはなかった。いつも彼は、何もない空にかみつくのであった。そのようなふざけがもう終ろうという時、なぐったり、平手打ちをしたり、かみついたり、うなったりすることの速度が高まり、はげしくなったとみるまに、突然、彼らはやめて、パッと数フィート離れて立ち、互ににらめっこをした。それから、これも突然、ちょうど、あらしの海にのぼる太陽のように、彼らは笑い出すのであった。これは、常に、主人の腕が白牙の頭と肩に巻きつき、そして白牙が、例の低い調子で、愛の歌をうなるところで絶頂に達するのであった。

しかし、外にはだれも白牙とふざけた人はなかった。彼は、それを許さなかった。彼は、彼の威嚴を固守し、だれかがふざけようとしても、それに対する彼の警告的なうなりと背すじにさか立つ毛とは、決してじょうだんではなかった。彼が主人にこれらの特典を許したのは、こゝに愛情を示し、かしこに愛情を示し、あらゆる人のなぐさみものたる、ありふれた犬であったからではなかったのだ。彼はたゞひとすじの心情で愛し、わが身、もしくは、わが愛を安賣りすることをこばんだ。

主人はよく馬に乗って出かけ、そのおともをすることは、白牙の生活のおもなる仕事の一つであった。北國では、彼は、そりを引いて、忠誠を証拠だてたが、南國にはそりもなく、また、犬が背中に荷物を運ぶこともなかった。そこで、彼は、主人の馬といっしょに走るという新方法で忠誠を表わした。いちばん長い日にも、白牙は決して疲れるようなことはなかった。彼の歩行は、おゝかみの歩行であり、なめらかで、疲れを知らず、努力を伴なわないものであったから、五十マイル走ったあとでも、彼は馬の先頭を軽快に走るのであった。

白牙が、いま一つの表情様式を得たのは、この乗馬に関連してであった。――その表現は、彼の一生のうち、たゞの二度しかなかった、という点で、特に注目に價する。その第一回は、主人が、元氣のよい純血種の馬に、下馬しないまゝで門を開閉する方法を教え込もうとした時に起った。彼は、門をしめようとして、何度も何度も、馬を門に乗りつけたが、そのつど、馬はます〳〵おびえて、しりごみし、飛びのいた。馬は、刻々ます〳〵神経過敏になり、興奮してきた。その馬があと足で立った時、主人がそれに拍車を当てて、前足を地上におろさせると、こんどは、あと足でけりはじめるというしまつであった。それを見ていた白牙は、だん〳〵氣がかりになってきて、ついには、じっとして

いられなくなり、馬の前へ飛び出して、どうもうに、そして警告するようにほえた。

その後も、彼はほえようとし、主人もそれをすゝめたが、彼は、たった一度それに成功しただけであり、しかも、それは主人の不在中であった。草原を疾走していると、突然野うさぎが馬の足もとから飛び出し、主人は、馬を急轉回したため、落馬して、片足を折った。白牙は、激怒して、無禮を働いた馬ののどに飛びかゝろうとしたが、主人の声に制止された。

「帰れ。うちへ帰れ。」と、主人はけがを確かめてから、命令した。

白牙は、途中で主人のもとを去る訓練をうけていた。主人は、手紙を書こうと思った。ポケットの中に紙とえんぴつを探ったが、なかった。で、再び、彼は、白牙にうちへ帰れと命令した。

白牙は、心配そうに主人を見つめて、それから出発したかと思うと、また引き返して來て、低い声でくん〱と泣いた。主人が、優しく、しかし、重々しく、彼に話しかけると、彼は耳を立てて、いたましくいっしんに聞いていた。

「それでいい。おまえは、うちへ帰ればいいのだ。」とことばはすゝんだ。「うちへ帰って、おれにふりかゝった出來事を、家の者たちに話すんだ。帰れ、おゝかみ。急いでうちへ行け。」

白牙は「うち」の意味を知っていたから、その外のことばはわからなかったが、家へ帰れというのが主人の意志であるのを知った。向きを変えると、彼は、しぶ〱走り去った。それから、まだためらいながら立ち止まって、肩ごしにふり返った。

「うちへ帰れ。」というするどい命令がきた。で、こんどは彼はそれに従った。

白牙が着いた時には、家族の者たちは玄関に出て、涼をとっていた。彼は、ちりにまみれてあえぎながら、彼らの中へはいって來た。

「ウィードンが帰ったんだよ。」とウィードンの母が告げた。

子どもたちは、歓呼して、駆け出して行って、白牙を迎えた。彼は彼らをはずして、玄関へ進んだが、子どもたちは、彼をゆりいすとてすりとの間へ追いつめた。彼はうなって、彼らを押しのけようとした。子どもたちの母は心配そうに、その方向を見た。

「あの犬を子どもたちのそばに置くのは、心配でならない。」と彼女は言った。「いつか、だしぬけに、子どもたちに飛びかゝるんじゃないかと、あたしは、びく〱ものだわ。」

猛烈にうなりながら、白牙はすみから飛び出して、少年と少女とをひっくり返した。

母は、子たちを呼び寄せて、なぐさめ、白牙に手出しなどしないようにと言いきかせた。

「おゝかみはおゝかみさ。」とスコット判事は注釈した。「信用なんかできるものか。」

「でも、あれは、すっかりはおゝかみじゃないことよ。」と、不在中の兄に代わって、ベスがことばをはさんだ。

「それはウィードンの意見の受け賣りにすぎんじゃないか。」と判事は答えた。「彼は白牙に、いくぶん犬の血がかゝっていると推量しているだけで、ご本人も言ってる通り、それについては何も知らんのだよ。それに、あの姿の点からいえば……。」

彼は、そのことばを終りまで言わなかった。白牙が彼の前に立って、猛烈にうなったからだ。

「あちらへ行け。寝ておいで。」とスコット判事は命令した。

白牙は、愛の主人の妻の方に向かった。彼が彼女の着物をくわえて、引っ張ると、彼女はかなきり

ウィードン　白牙の主人の名。

スコット　ウィードンの父。

声をあげ、もろい織物は引き裂けてしまった。この時までに、彼は興味の中心になっていた。彼はうなることをやめて、頭をもたげて立ち、人々の顔をのぞき込んでいた。彼は、口に表わそうと必死になっていながら、しかも傳えることのできぬことを、早く言ってしまおうとする努力で全身を引きつらせてもがくのだったが、のどが、たゞけいれん的に動くだけで、声は出なかった。

「狂犬にならねばいいんだけれど。」とウィードンの母が言った。「暖かい氣候は、極地の動物には合わないのじゃないかい、とウィードンに言うんだけれどもね。」

「あの犬は、きっと、何か言おうとしてるんだわ。」とベスが告げた。

この瞬間に、ことばが、突然大きなほえ声となって、白牙ののどから飛び出してきた。

「ウィードンに、何か起ったのだ。」と彼の妻はきっぱり言った。

ようやく、一同は立ち上がり、白牙は、後からついて來いといわんばかりに振り返りつゝ、階段を駆け降りた。一生の間に、白牙がほえて、思っていることを理解させたのは、これが二度めで、そして最後であった。

（「荒野に生まれて」本多顕彰の訳による）

【学習の手引】

(1)白牙のいろ〳〵の態度動作を、人間の感情で受け取ってあるが、どんな動作をどんな感情として受け取っているかみる。

(2)この話に、五枚のさし絵を入れよう。その場面と、それに添える短い語句を考える。

(3)この話を、弟妹、その他、学齢前の子どもに話すのにふさわしいように、書き直す。

(4)動物絵本について、その場面と書いてあることばについて批評する。

二、動物園

川路柳虹

前課につながる心持で、獣をうたった詩を読んでみよう。

川路柳虹、本名は誠。明治二十一年（一八八八）東京で生まれた。詩人。口語体で、また字数もさま〴〵な、いわゆる、自由詩をおこした人である。著書には、「路傍の花」・「蘆の笛」・「明かるい風」などの詩集のほか、詩論もある。この課は、十四編からできている「動物園」から、四編を採ったものである。

らくだ

おまえのひとみのなかには
かぎりない沙漠の海、
その果てに落ちる血紅色の入り日と
その果てに見いだすやしの葉かげの
緑のオアシスとがうつっていよう。
おまえのひとみの柔和は
その夢を私に感じさせる。
だがこゝのさくはなんだ、
こゝの土はなんだ、
しかも平氣な顔をして
子どもの投げるパンを食べている

おまえの郷愁は
おまえのからだの奥にかくれたのか
女面獅子像(スフィンクス)と三角塔(ピラミッド)の
あの偉大な郷國の夢をば
人々がおまえから奪い取ったためか。

スフィンクス　昔、エジプト・アッシリアなどで王宮・神殿・墓などの入口にかざったもの。

ピラミッド　エジプトのナイル川下流地方にある古代國王の墓。

マンモス　大昔に住んでおり、今は滅びてしまった動物。ぞうに似てもっと大きい。

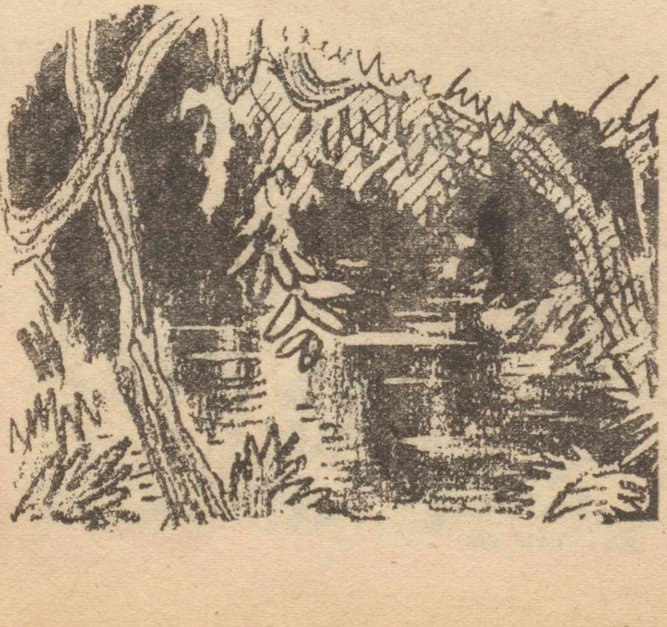
ぞう

人間という小さな動物は
歴史の首かせにおしつぶされ、
世界をその頭脳と心臓との
狭い関係にちゞめている。
あゝ、マンモスの砂煙立てて大地を、
沼沢を、森林を闊歩(かっぽ)していた時代よ。
火星は月夜より明かるく
巨大なにれのこずえにゆれていた夕
思いみよ、吹きまくるあらしに
さんらんと砕ける銀河の海を、
おまえはゆく、おまえは渡る、

ひたむきに、おゝどかに
行かんとするところへいっさんに進むのだ。
おまえの精神はどこにある、今
おまえの精神こそ必要なのだ。
それなのに
おまえのきばは鎖につながれた
首の下にむなしく上を向いている。

しゝ

暴王よ、
おまえは今眠る、
「怒り」がおまえに與えられた
唯一の宝か。
ひょうかんなそのたてがみが
熱砂のなかを駆けめぐり
球(たま)のような前足が
なにものをもつかむのは……
暴力の是認をば



神は人に示すのか。
しかし暴王よ、――
おまえは今眠る。
眠ったおまえの前には
あぶ一匹すら安全だ。

と ら

燃える夜の深林に
おまえはほえる。
「やみ」が何か怪しい影を
おまえに見せつけた。
とらよ、きばをむけ、
おまえの蹂躙に任すものは
たゞにインドの草原ではないのだ
とらよほえたてろ
この暗い夜のなかに
「眞理」をさがす探險者は
ひつじのようであってはいけない。

おまえの怒号がやくざなものの
夢と迷妄とをしりぞけて
おまえのえじきとなるまでは・・・・
とらよ。ほえたてろ。

(「現代日本文学全集」第三十七巻による)

【学習の手引】

(1)読み方をくふうする。
(2)作者が、美しいとしてあこがれている、人間の姿なり心持なりが、動物の中に見いだされているのを、一つ〳〵の動物について考える。
(3)強い、たくましい感じを出すのに役だっていることばを抜く。
(4)弟や妹や年下の子どもが、遊びながら、動物に呼びかけていることばを集める。

六 森の絵

寺田寅彦

寺田寅彦は、明治十一年(一八七八)東京で生まれ、昭和十年(一九三五)になくなった。文名を吉村冬彦という。物理学者。著作は、「寺田寅彦全集」としてまとめられている。

暖かい縁に背を丸くして横になる。小枝の先に散り残った枯れ〳〵のもみじが目に見えぬ風にふるえ、時に、はえのような小さい虫が小春の日光を浴びて垣根の日陰を斜にひらめく。まぶしくなった目を室内へ移してかもいを見ると、こゝにも初冬の「森の絵」の額がうすら寒くかゝっている。

中景の右の方はかしか何かの森で、はい色をした、たくましい大きな幹はすく〳〵と立ち並んで、次第に暗い奥の方へ続く。すきまもない茂りの緑は霜にやゝさびて、えもいわれぬ色彩がこずえからこずえへと柔らかに移り変わっている。コバルトの空にはたまご色の綿雲が流れて、遠景の廣野の果ての丘陵に紫の影を落す。森のはずれから近景へかけて石ころの多いこみちがうねって出る所をだいだい色の服を着た豆大の人が長い棒をつえにし、前に五、六頭の牛羊を追うてとぼ〳〵出て來る。近景には低い灌木がところどころ茂って、中にはほうきのような枝に枯れ葉がわずかにくっついているのもある。あちらこちらに切り倒された大木の下から、まっさおな、しだののこぎり葉がのぞいている。

むしろ平凡な画題で、作者もわからぬ。が、自分はこの絵を見るたびに静かないなかの空氣が画面から流れ出て、森の香はかおり、ひよどりの叫びを聞くような氣がする。その外にまだなんだか胸に響くような鋭い喜びと悲しみの念がわいてくる。

二十年前のわが家のすぐ隣りはおじの屋敷、いとこの信さんのうちであった。

いつか信さんのへやへ遊びに行った時、見なれぬ絵の額がかゝっていた。なんだと聞いたら油絵だと言った。そのころ、いなかでは石版刷りの油絵は珍しかったので、西洋の絵といえば学校の臨画帖より外には見たことのない目に、はじめてこの油絵を見た時の愉快な感じは忘れられぬ。絵はやはりいなかの風景で、ゆるやかな流れの岸に水車小屋があって、やなぎのような木の下に、白いずきんをかぶった女があひるにえでもやっている。どこで買ったかと聞いたら、町の新店にこんな絵やもっと大きな美しいのがたくさんに來ている。ナポレオンの戰爭の絵があって、それもほしかったと言う。

うちへ帰って夕飯の膳についても絵のことが心を離れぬ。たそがれにそでなしをはおって母上と裏の垣でかんちくたけのこを抜きながらも、絵のことを思っていた。薄暗いランプの光でかんちくの皮をむきながら、美しい絵を思い浮かべて、さびしい母の横顔を見ていたら急に心細いような氣が胸に吹き入ってまつげに涙がにじんだ。なぜ泣くかと母に聞かれてなお悲しかった。そんなにほしくば買ってあげる。男のくせにそんなことではとさとされて更にしゃくりあげた。母は虫おさえの薬を取り出して飲ませてくれたが、あの時の自分の心は今でも説明はできぬ。幼く片親の手一つで育ってあまり豊かでない生活がおぼろげに胸にしみ、うきよの木枯らしはもう周囲に迫っていたから、何かの刺激はすぐにわけのわからぬ悲しみを誘うたのだ。

あくる日ぜにをもらってまず学校へ行ったが、教場でもとき〳〵絵のことに心を奪われ、先生に何か聞かれても、何を聞かれたかわからぬようなこともあった。放課のベルを待ちかねて学校を飛び出し、信さんに教わった新店を尋ねたらすぐにわかった。店へはいると一面につるした絵のニスの香に酔うてしまう。あれもよい。これも氣に入った。かじ屋のえんとつから吹き出るまっかな炎が黒い木にはえて、遠い森の上に青い月が出ている絵もほしかったが、なんとなく静かなこの「森の絵」に決めた。粗末な額縁をはめてもらって、その上をだいじに新聞で包んで店を出た時は、心臓が高い音をたてておどっていた。

帰り道に旧城の後を通った。お城のすぎのこずえはちょうどこの絵と同じようなさびた色をして、おほりの石がけの上には葉をふるうたむくの大木が、枯れごもの中の冷たい水に影を落している。ほりに隣った牧牛舎のさくの中には親牛と小牛が四、五頭、愉快そうにからだを横にゆすって、はねている。自分もなんだかうれしくなって口ぶえをびゅっぴゅっと鳴らしながら飛ぶようにして帰った。

森の絵が引き出す記憶には限りがない。縦一尺、横一尺五寸の粗末な額縁の中にはあらゆる幼時の美しい幻がたゝみ込まれていて、おりにふれて画面に浮き出る。現世の故郷は移り変わっても、絵の中に映る二十年の昔はさながらに美しい。外の記憶が薄れてくるほど、森の絵の記憶はあざやかになってくる。

他郷に漂浪してもこの絵だけは捨てずに持って來た。額縁も古ぼけ、紙もだいぶすゝけたようだが、「森の絵」はいつでも新しい。

（「寺田寅彦全集」第一巻による）

【学習の手引】

(1) この文のよさを説明するには、何々の点について、述べたらよいか、考える。
(2) 「森の絵」は、どういう意味で、いつでも新しいのか、考える。
(3) 少年の心持の動きを考える。
(4) 特によく書けているところについて、味わいを説明する。

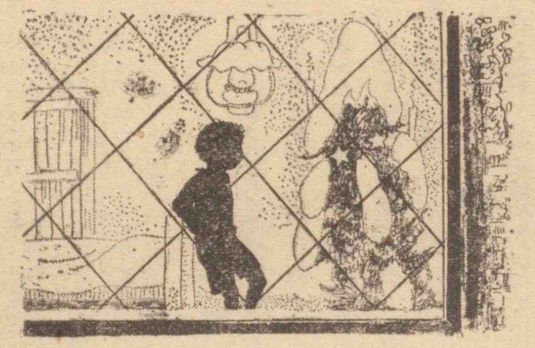
七　ペェアの旅

ストリンドベルグ

ストリンドベルグ（August Strindberg）（一八四九―一九一二）は、スエーデン近代の代表作家である。「赤いへや」・「父」・「痴人の告白」・「大海のほとり」など、たくさんの小説・戯曲を書いた外、評論も多い。

（第一、二幕のすじ）

ペェアは鐘楼もりのむすこである。その老父は、ペェアに、世の中の悪や悩みを知らすまいとして、ペェアを鐘楼の外へ出したことがなかった。



クリスマスの夜だった。老父は、小鬼にクリスマスのおかゆを供えたが、いたずらねずみに食べられてしまって、小鬼が現われた時には、もうなんにもなかった。小鬼はおこった。そして、仙女を呼んで、鐘楼もりのむすこを堕落させてくれないかと頼んだ。堕落――つまりこの鐘楼から連れ出して、世の中の経験をさせようとした。仙女は、ペェアが、世間へ出て、自分たちがどうすることもできないような苦しみに会ったらかわいそうだと言う。そこで小鬼は、ほしいと思うものの得られる「願いの指輪」を、仙女は、道づれの女の子リーザを、おくりものにすることにした。

仙女は、まず窓から、はるかに世の中を見せた。クリスマスの樂しい家の中を見せた。ペェアは、どうしても、外へ出してくれと言う。仙女は、「生活というものが、おまえに生きる道を教えてくれて、旅が終った時、どんなふうになるにしても、とにかくひとりの人間らしい人間になることを望んでいる。」と言って別れた。

第二幕の初め、ペェアは森にいる。雪を見て、玉にして投げてみたり、こずえを吹く風の音を喜んだりするが、じきに飽きてしまう。凍った小川を見つけてすべる。氷が割れて、倒れているところへ、リーザが出て來る。そして、ペェアが倒れた時、落した指輪を拾い上げた。リーザは指輪の不思議は知らなかったが、「今が夏ならねえ。」と言いながら、なにげなく、指輪を回したので、たちまち、夏のけしきになり、ペェア

は立ち上がった。ペェアは、リーザと、おにごっとをして遊んだり、くだものを食べたりしたが、思っていたほど、楽しくもおいしくもなかった。

ペェアは、この森に飽き、民衆の中へ、はいって行きたいと言う。また、民衆は、何に、いちばん價値をおくのかと聞く、リーザは、「おかね」と答える。

次の場面は、富豪の家の廣間である。ペェアは、金の着物を着て、金のいすにかけている。召使もおゝぜいいる。しかし、礼儀作法がやかましく言われる。徴税吏が、税を査定に來る。弁護士が、財産認定のため、市役所へ來てくれと言ってくる。また、道路のそうじを怠ってあるとて、裁判所から呼び出しに來る。ペェアはつく〴〵いやになって、こんなのが金持の運命かと嘆く。

第三幕

町の廣場、右手に市役所のアーケイド。その上に市長と市会議員の席を設けた望楼。

左手に飾り窓と看板のあるくつ工の店。その前に腰かけとテーブル。それにくっついてとり小屋と手おけ。

廣場のまん中に鎖のついた首かせの二つあるさらし台。その上にむちを手に持った人の姿をしたさらし柱。

右手中央の廣場に、市長ハンス＝シュルツェの全身像、月桂冠を額にし道路工事に用いるつちの上に身をかがめている。

背景、町の遠見。

さらし台　（銅像に向かってていねいに頭を下げる）おはよう、銅像さん。ゆうべはよくおやすみになれましたか。

銅　像　（うなずく）おはよう、さらし台さん。おまえさんはよく寝られたかね。

さらし台　よく寝られましたとも。夢まで見ましたよ。どんな夢を見たか当ててごらんなさい。

銅　像　（ぶきげんに）それがわたしにわかるもんか。

さらし台　こんな夢を見たのですよ――不思議でしょう――ある改革者がこの町へ來るという夢を見たのです。

銅　像　なに、改革者――（地だんだを踏む）ちくしょう。こんな所に立っていたら足が冷たくなるばかりだ。名誉のためなら、人間なんでもしないことはないはずだ。改革者だと。すると、そいつもまた銅像になるのだな。

さらし台　銅像。いかにも。だが、その男は自分で銅像になるのです。わたしの足の下で。わたしがこの両方の手で首筋をつかむのです。（首かせが鳴る）その男はほんとうの改革者です。いかさま師ではありません。ちょうど生きていらっしゃるじぶん、あなたがそうであったように。

銅　像　だまれ。よく恥ずかしくもなく、そんなことが言えたものだ。

さらし台　いかにもそうです。しかし、わたしはいつも正義の味方をするのです。（むちを振る）

銅　像　いったいその男はどういう特別の仕事をしたのだ。

さらし台　道路工事の改革者だったのです。

銅　像　道路工事の。ひどいやつだ。ではおれのなわばりを侵すのだな（つちで地面を突く）

さらし台　いえ、その人はあなたがへたにやったことをうまくやったのです。もしあなたが市長のしゅうとでなかったら、そこには立っていられなくなったでしょう。

銅　像　だがわしは往來に石を敷くという新しい考えを実行した人間ではないか。

さらし台　なるほど、そうです。しかし、あなたの考えは新しくはなかったのです。いったいあなたはどんなことをなさいました。以前は柔らかい砂の上を踏まなければならなかったのです。ところで、今はとがった石やごろ〳〵する石の上をつりあいをとって歩かなければならないのです。足もくつもめちゃめちゃになってしまいます。道のいいのは、たゞあなたのお宅から居酒屋へ参る道だけです。あなたはそこへ平ったい石を置いて足がかりの橋をおこしらえになったのです。

銅　像　そこで、その改革者だか、いかさま師だかは、わしがしたことをやり替えようというのか。

さらし台　その人は、あなたが敷いたものを、みんなはぎ取ってしまって町じゅうの往來を「市長石」で固めようというのです。そうなれば、だれもかれもいい心持で歩けるのです。

銅　像　そいつは法律の破壊者だ。

さらし台　いかにもそうです。その人は自分の政党というものを持っていません。あなたの方には車つくりがついています。くつ工がついています。手足医者や市長までがついています。だから、あなたは成功したのです。

銅　像　氣をつけないとあぶないぞ。その男がわしの仕事をこわして投げ出した石は、こと〳〵く民衆の手でその男に投げつけられるに違いない。わしはわしの記念に手をつける男をのろう。

さらし台　あの人にあなたの面皮がはがさせたい。あなたはあなたが死んでから、どうして偉人のひとりにまつりあげられるようになったか、その順序を覚えていますか。まず最初におとむらいのとき、お金を二十マークもらって、坊さんがあなたの人格について演説をしたのです。それから、あなたの道路工事で金持になった請負師があなたの徳をたゝえる演説をしたのです。それから、あなたの道路工事でいろ〳〵の実験をすることができた手足医者があなたのためにメダルを作ったのです。それからあなたの道路工事で車の修繕をしてもうけた車つくりが、自分の工場にあなたの名をつけたのです。それから最後にくつ工があなたの記念にお祭りをしたのです。そこで、とう〳〵こんなことになってしまったのです。あなたの婿（むこ）の市長さんが、あなたの像を建てるために寄付金の募集をしたのです――だれも反対をする者はありませんでした。そこで、あなたはそこに立つことになったのです。

銅　像　いかにもそうだ。おまえはそれを悲しんでいるのだね。きょうはシュルツェ会の人たちが花輪を持ってやって來て、記念の歌をうたうことになっている。それはわしのむすこの命令だ。それを聞いたら、おまえはまた不愉快になるのだろうな。

さらし台　それはそうかもしれません。しかし、わたしの夢がほんとうかうそかすぐわかるでしょう。

銅　像　おだまり、会の人たちが來る。

さらし台　さあ、ふき出さないように横っ腹を押さえていなければならないぞ――シュルツェ会の会員はみんなでたった三人か。去年は六人でした。あなたはもう下り坂です。もうじきあなたは野原へ投げ出されてしまうでしょう。

銅　像　偉大な人間を尊敬し、過去の追憶を保護する民衆は、決して銅像を野原へ投げ出すほど墮落するようなことはないだろう。

くつ工、家の中から出て來て、飾り窓をあける。

くつ工　ゆうべは雨が降ったとみえるな、シュルツェさんの像が、あんなに光っている。合唱團が來るまで天氣でいればいいが。（店のうちへ向かって叫ぶ）ハンス。

ハンス　（窓に首を出して）へえ、親方。

くつ工　その窓の所にすわって仕事をしていろ。おれは町の用で出かけるから。

ハンス　へえ、親方。

くつ工　よく見はっていねえと、あぶみ型で背中をどやしつけるぞ。わかったか、ちくしょう。

ハンス　へえ、親方。

車つくりが旗を持って出て來る。

車つくり　おはよう。くつやさん。

くつ工　おはよう。

手足医者、月桂冠を持って出て來る。

手足医者　おはよう。おはよう。市長の來るのを待っていなければならないのか、急いで出かける方がいいと思うが、今にも降ってきそうだぞ。

くつ工　おれもけさからそう言っていたのだ。だから、おれは雨がいとうを持って來た。りこうだろう。

車つくり　みんなこゝへ集まって、行列を作らなければならないはずだが、ねこ一匹見えないな。くつ屋さん。きょう記念日のお祝いをするって、印刷屋さんに言わなかったのか。

くつ工　言ったとも、言ったとも。

車つくり　みんなこの銅像の足もとに輪になろう――そうだ。

手足医者　まずカンタータを始めよう。そのうちにみんな集まって來るだろう。

車つくり　市長が來ないのはわからないな。今までは、いつもおれたちにお酒をごちそうしてくれたのだがな。

くつ工　歌を始めたら目をさますだらう、もし、寝ているのなら。――さあ、始めた。――ド、ミ、ソル、ド。

車つくり　じゃあ、おれが始めよう――だが、トリオになった時はいやな合唱にならないように氣をつけようぜ。

（独唱とチタチフ）

市長万歳

恩人万歳

人生はねたみの火のうちにわれらの行ひを燃やすさあれ、追憶は不死鳥のごとく

その翼に行ひを載せてあまがけるなり。

くつ工　うまい、うまい。車屋さん。まだお酒の來そうなようすはないか。

車つくり　さあ、やった、くつ屋さん。今度はアリアだ。氣を入れてうたってくれ。そうすれば、市長が目をさますに違いないから。

カンタータ　交声曲。

トリオ　三重唱。

アリア　詠唱。歌劇の中の旋律的な歌のところ。

くつ工　（アリア）
　ばらの吐息（といき）、せきちくのにほひ
　おしろいばなのさだめのもと。
　　頼みなの心よ、
　　波のしぶきのごとく、
　　女は髮の毛の波を送る。
　　大海のにほひつたへて
　　赤きゆり、白きゆり、
　　死と生をしみ〳〵と思ふ。
手足医者　りっぱな歌だ。だが、きょうの祝いには関係がないようだな。どこで覚えてきたのだ。
くつ工　うちにこぞうがひとりいる。なか〳〵理想家だがな。日曜日にひまがあると、こんな歌を作っているんだ。
車つくり　わたしの考えを言わしてもらえば、対句（ついく）のこつをつかまえるのは、なか〳〵むずかしいものらしい。
くつ工　そこが微妙な点だよ。だが、待ちたまえ――雨が降ってきたようだ。（がいとうを着る）
車つくり　どうだ諸君、あの年とったいかさま師のために、雨の中に立っていて、ずぶぬれになる値うちがあるだろうか。
くつ工　だが、われ〳〵は歌をうたうために報酬をもらっているのだ。帰る前にトリオだけはうたわなければならない。われ〳〵がいっしょに始めれば、悪魔だって眠ってはいられまい。祝いの演説ならいつでもできるが、大演説をするにはあまり聞き手が少なすぎるからな。ではまずトリオを始めよう。――ド、ミ、ソル、ド。アリアのような理想的ではないが、特別な関係で、もっとおゝぜいの人の親しみを表わすことができる。
　雨ばら〳〵と降る。風それに加わる。
手足医者　あの年とったいかさま師のために、この上、こゝに立っていて、かぜをひいてはたまらない。一人まえ六マークの報酬か。そんなものもらわなくってもかまわない。
車つくり　わしもそう思う……。
くつ工　きみはこの銅像を建てるのに寄付したひとりではないか。メダルでこの人を偉人にしたひとりではないか。
車つくり　いかにもそうだ。そうしなければはり倒されたのだ……。
くつ工　だが、その記念を尊敬しないのは忘恩だ。ぼくはひとりでトリオをうたうよ。
手足医者　それはきみにはできるだろう――きみはがいとうを持っているのだからな。ぼくはうちへ朝飯を食いに行くよ。（花輪を銅像の台の上へ投げ出して、上着のえりを立てて、駆け出して行ってしまう）
車つくり　もう人の見せものになるのはたくさんだ。さようなら。（行ってしまう）
くつ工　では、これから市長のところへ行って、酒にありつこうか。だが、まずそれより前に、その台の上に乗っている老人に向かって演説をしなければならない。そうすればおれの良心がもっと安まるだろう。（銅像に向かって言う）シュルツェじいさん、ぼくらがうたったり演説したりするのを

きみは自分のためだろうと思うだろうね。ところが、われ〳〵がそれを自分のためにやっているのだということは、とてもわかるまい。われ〳〵は自分たちが小さすぎるということがわかると、大きな人間を前の方へ押し出すのだ。だれもわれ〳〵を信用しない時には、きみのことばを引用するのだ。この小さな町は、自分を大きくするのにきみの銅像がいるのだ。きみの哀れな親類たちはきみの銅像をたてにして、このいやな世界で職業をさがしているのだから、きみはわれ〳〵の上に高くすわっているのだ――そのくせ中味はなんにもないのだ――だが、ぼくの言ったことはほんとうだろう。悪者め、おまえは最初のものと最後のものとを聞いたのだ。（驚いて）だが、だれも聞いてはいなかったろうな。は、は。向こうから偉人の親類がやって來た。

親類の者登場。

親　類　おはよう。くつ屋さん。破廉恥な攻撃をするやつが出て來ましたが、お聞きになりましたか。

くつ工　どうしたのです。なにごとが起ったのです。

親　類　ある改革者が町へやって來たのです。あなたはそいつの書いた宣傳ビラをお読みになりませんでしたか。

くつ工　いえ、いえ。

親　類　実にけしからんことが書いてあったのです――ご自分で読んでごらんなさい。

くつ工　わたしは氣がたっていますから、とても読めません。どうか読んで聞かせてください。

親　類　では、お聞きください。その悪者はこんなことを書いているのです。「市長シュルツェが古い砂土に代うるに、ごろた石をもってして、道路の設計に一大革新をしたような顔をして、こゝの市民を喜ばしてから、まだ四分の一世紀もたっていない。」聞いていますか。聞いていますか。

くつ工　えゝ、聞いています。だが、それだけのことなら別に驚くことはありません。

親　類　驚くことはない。この男はあの人のことを市長シュルツェと呼んでいるのですよ。死んだ人のことを市長と呼んではなりません。われ〳〵の偉人とでも言うべきです。それにこの悪者は、ごろた石なぞと書いています。それによってあの人の功績をけがそうとしているのです。

くつ工　だが、それを攻撃ということはできません。ごろた石だからごろた石だと言ったまでのことでしょう。

親　類　もちろん、それはごろた石です。けれども偉大な人がそれを使った場合に、そんなことを言うのはまちがっています。氣をおつけなさい、くつ屋さん。あなたは懐疑家です。氣をおつけなさい。どんなことになるかわかりませんぞ。

くつ工　いや、わたしは断じて懐疑家ではありません。わたしは現にこゝに立って友人シュルツェを賛美する歌をうたっていたのです。

親　類　友人ですと。もしあなたが、あの人の生きている時代に、あの人の兄弟だったとしても、死んでしまえば、そういった関係はすべて絶えてしまうはずです。あなたはこれが悪口だということを認めますか。

くつ工　もちろん、それは認めます――わたしは少しでもそれに反対なことを言ったでしょうか。わたしが何か反対のことを言ったのなら、そのしるしを見せてください。

親　類　いゝえ、だが、お氣をおつけなさい。九時になると、こゝで市会が開かれるはずです。そこでその改革者が自分のことを話すはずです。あなたはいったいその男が何を要求しているかごぞんじですか。

くつ工　いゝえ、知りません。

親　類　実にけしからんことです。この町の道路に全部平らな石を敷こうというのです。

くつ工　だが、それはなか〳〵いい考えですね。

親　類　（ひにくに笑う）いい考えですって。なるほどいい考えだ――たとえば、あなたの商賣についていってみても、もうくつが破れないことになったら、ごりっぱなくつ商賣もどうなりましょうな。

くつ工　なんですと。何をあなたは言うのです。いや、失礼。いかにもあなたのおっしやる通りです。わたしは、自分のけちな商賣などはどうなってもかまわないのです。たゞ不しあわせな労働者が職を失ったら、かわいそうだと思うばかりです――労働者の哀れな妻や子どものことを思うだけです。

ハンス　（窓の所で仕事をしながら顔をゆがめる）哀れな不しあわせな労働者か。

親　類　ごらんなさい。ごらんなさい。（像を指さす）この人は貧乏人の友だちでした。この人は自分のすることを知っている人でした。

くつ工　車屋さんだって、手足医者さんだって、わたしの考えとおんなじに違いありません。

親　類　それは確かですか。

くつ工　命にかけて。

親　類　偉人を尊ぶ民衆は幸福なるかな。（急いで去る）

群衆、入り來たる。親類の者は車つくりと手足医者とを相手にして何か話している。市役所の時計が九時を打つ。ふたりのラッパ吹きと太鼓打ちが出て來て、あいずの曲を奏する。音楽がやむと、ペェアが出てくる。道路工が後から來て、いっしょになる。

ペェア　おはよう。親方。いったいこの問題はどうなると思います。

道路工　だめだ。とてもだめだ。

ペェア　では、民衆は改革を望んではいないのですか。

道路工　問題はそんなことではないのだ――問題はきみが偉人の名誉を傷つけたということになっているのだ。

ペェア　わたしがそんなことをしたでしょうか。

雨やむ。

道路工　きみはあの人を市長とよんだ。そして、その肩書はこの町では侮辱のことばとなった。きみはあの人が道路に敷いた石をごろた石だと言った。――一言でいえば、きみはあの男についての一般の意見を述べたんだ。そして、そのためにきみは突き落されたんだ。

ペェア　われ〳〵の住んでいるこの世界は実に不思議なところですな。

道路工　この世界はよくもあれば悪くもある。そして、ほんのちょっとした特色を持っているのだ。だが、その特色を助けるような仕事をしてはならない。もしそんなことをしたらひどいめにあ

う。

ペエア　民衆はみんな不満足でいるのです。そしてだれかがその不満足の原因を掘り出そうとすると、彼らはその人に向かって石を投げるのです。

ひとりのこぞうがふたりにちらしを一枚渡す。それから駆け出して行って、群衆になお多くのちらしをまく。

ペエア　（ちらしを見て）　ひどいやつだ。これはわれ〱の写生だな。ぼくはこんな鼻をしているだろうか。

道路工　こいつは一番やられた――だが、おれはこんな鼻をしてやしない。

ペエア　ぼくにはわかりません――きのうは新聞の主筆がぼくのみかただったのです。ところがきょうは、ぼくを悪く言うのです。

道路工　それが世論というものだ。あの人はぼくに向かってこう言った。この運動には賛成する。しかし世論を破ることはできないと。

ペエア　不思議な仕事のしかたもあったものです。すると、あの人にとって世論というものはどういうものなんでしょう。

道路工　第一には新聞の読者だ――それから市長――それから金。それから権力。

ペエア　では、なぜあなたをポンチ絵にかいたりなどするのでしょう。

道路工　それはぼくがきみの提議に賛成したからだ。もちろん、ぼくはそれで金がもうけられると思ったから賛成したんだ。ところが、あいつはその間に、こんな詩を五百から賣ってるんだ――

ラッパと太鼓。市長・市会議員・書記など望楼に現われる。

市　長　皆さん、あなた方はある大詐欺師がこの町へ来たことをお聞きになりましたか。

民衆の中のひとり　詐欺師ではない。改革者だ。

市　長　それは結局同じことです――しかし、こぞうさん、おまえさんは口を開いてはいけない。おまえさんには発言権はないのだから。

ペエア　市長閣下、私は私の提議が、そのまゝこの尊敬すべき民衆の集まりに提出されんことを希望いたします。

市　長　お聞きなさい。お聞きなさい。われ〱は既にあの人の提議を知っています。われ〱に残された問題は、われ〱が、われ〱自身の意見を発表することです。私はあの男を氣違い病院へ預けるのがもっともよいと思っています。あの人の希望するところは、すべての人がなめらかな敷き石の上を歩くことができるようにすることです。われらの主が人間をひとりひとり違って作られた以上は、道路の石も一つ〱違っていたって、なんの妨げにもならないはずです。だれかまだ外に意見を述べるものがありますか。

民衆のひとり　それはうそだ。われらの主は決してわれ〱を違った種類にはお作りにはならない。

市　長　だれがあなたに叫ぶ権利を与えました。

民衆のひとり　われ〱は発言権を持っていないのです。ですから、せめて叫ばしてください。

市　長　よろしい、そんならお叫びなさい。わたしはあなたがたを留置所へ入れてしまいますから。ではもう外に意見はありませんね。

親　類　市長閣下、名誉ある人間として、私はこゝになされた侮辱的な悪口に対して、抗議を申し出ようと思いますが、いかゞでしょうか。

ペェア　ぼくは親類のかたに対して異議を申したてます。

市　長　わたしは親類のかたの発議を重んじたいと思います。なぜといえば、あのかたは偉大な人物に関係がある方ですから。それはいつもこの市会の特権になっております――提議は否決せられました。（ハンマーでたゝく）

にわとり（くつ店の外にあるにわとり小屋から）コケコッコウ。

市　長　あれはなんだ

民衆のひとり　あれは発言権の所有者です。

にわとり　コケコッコウ。

民衆のひとり　あいつを捕縛しろ。

笑い声、ざわめく。

市　長　静かになさい――第二に――いうところの冒険家は、この町の死んだ市長に対して、悪口を言うことによって、官廳の威厳を損ずるような行動に出られた。――われ〳〵は二、三の公平な市民に聞いてみよう――くつ屋さん、あなたのお考えはどうですか。

くつ工　私は官廳と同意見であります。

市　長　よろしい。われ〳〵はあの男のことを忘れない。手足医者さん。あなたのお考えはどうですか。

手足医者　私も賛成です。

市　長　車屋さんはどうですか。

車つくり　わたしは前に意見を述べたかたと同意見であります。

民衆のひとり　ものを言う権利のあるものは默っている。

市　長　静かになさい――「既に論証せられたるところのものを基礎とし、じゅうぶんなる証拠により、ペェアと称する冒険家は、事実をいつわり、官廳をおとしめたること明白なり。こゝに二時間さらし台に立たしめたるうえ、彼に対しては不名誉、他の者に対しては警告となさんがために、彼を市外へ放逐することを宣告す。」

ペェア　市長閣下、証拠不じゅうぶんであります。

市　長　もうこのうえ証拠は不必要だ。定理あるいは自明の理は証拠だてられもしないし、証拠だてる必要もない。その男を連れて行け。

ペェア、連れて行かれる。

市　長　第三に、町の犬が、なくなった人類の友であるハンス＝シュルツェの像の台座の上で、みにくきものに対する内部の感情を、見苦しく発表するという思いもかけないいま〳〵しい事実を考えて、銅像のまわりに鉄のさくを造るために、寄付金を募りたいと思います。かような人材に対して、かくもわずかな尊敬の寄与をするということに、反対のかたはだれもありますまい。

投票権の所有者たち　ありません。

民衆のひとり　投票権の所有者が、いゝえと言ったのははじめてだ。

市　長　役人、あの男を牢屋（ろうや）へ入れろ。すると、この提議は賛成されたのですね。

投票権の所有者　そうです。

民衆のひとり　（ひつじの鳴き声をまねる）メエエエ。

一瞬間、笑い声、ざわめき。

市　長　市会を閉じます。

ラッパとたいこ。やがて舞台静かになる。

親　類　（くつ工に）あの人は敏活に問題を解決しますね。あの市長さんは。

くつ工　あの人は政府にはいるといいのです。そうするとすべての國務がもっと早くはかどるでしょう。

市長、市会議員、書記など市役所の中へはいる。民衆、なお廣場をぶら〳〵と歩いている。くつ工・手足医者・車つくり・親類・道路工、離れて立つ。

くつ工　（手足医者と車つくりと親類とに）いかゞです。皆さん。わたしのところへお寄りになって、ビールを一ぱいあがりませんか。

手足医者・車つくり・親類　ありがとう。

くつ工　（戸口の所で何か言いつける。ハンス、ビールを持って來る）そこで、親類のおかた。あなたはけさあなたの偉大なご親類の記念祭においでになりませんでしたね。

親　類　雨の降るのに外へ出るのはごめんですからな。あなたがたは協会の連中といっしょにおなりになったんですね。

くつ工　えゝ、協会全員と。みんなで三人集まったのです。

親　類　では歌をおうたいになったのですね。

手足医者　えゝ、ほんの少しばかり。

親　類　おゝぜい人が参りましたか。

車つくり　ねこ一匹來ませんでした。

親　類　そして、市長は――

くつ工　寝こんでいて、出て來ませんでした。

親　類　（笑いながら）あなた方は「晨鶏（しんけい）新聞」をお読みになりましたか。

一　同　いゝえ。

親　類　（刷り物を取り出す）では、お聞きなさい――「追慕の式典、吾人が市の廣場に記念像を建てたる功績高き市民を追慕すべきシュルツェ協会の例祭は今朝執行せられたり。無数の群衆は、なき偉人の記念に捧げられたる合唱を拍手熱叫して迎へたり。歌は例年の通りの注意と訓練とを持てる大合唱團によりてうたはれたり。例年よりも更に美しく用意せられたる祝辞は、名誉あるくつ工プムペンブロック氏の朗々たる声調にて述べられたり。臨場の著名人物には市長、故人の親類、その他多数ありき。」

一同笑う。

親　類　どうです。

一　同　すてきだ。――それはあなたが書いたのですか。

親　類　ところで、あなたがたは、例の改革者と道路工の肖像をごらんになりましたか。なか〳〵よくかけています。

くつ工　だが、そんなふうに書くのは少しひどいと思いますね。

親　類　そうです。りこうな人間だったら、あの提議に反対はしないでしょう。だが、あゝいう人たちの手に渡ったのが氣のどくです――しっ、そこへやって來ました。

ペェア、番兵に引かれて出て來る。さらし台に載せられて、首かせをはめられる。群衆がその前へ集まって來て、ペェアを指さす。くつ工のなかまは少し困惑したようす。たて琴弾きと、盲の老婆、出て來て歌をうたう。

雷雨・風・雨・ざわめき。

くつ工　ちくしょう。また雨が降ってきた。うちへおはいりなさい。

一同散会する

老　婆　あのかわいそうな男は、雨が降っても、あのさらし台に立っていなければならないのですか。

親　類　わたしの親類のあの偉大な人物でさえ、あすこに立っていなければならないのだ。あの男が自分の立っている所に立っているくらいなんでもない。

くつ工　冷たい水を浴びたら改革者も少しは熱がさめるだろう。（ひざまずいて、敷き石につま先をぶつける）このごろた石め。（びっこをひきながらうちへはいる）

ペェアと老婆すなわちリーザの外、すべて退場。

リーザ　（着ていたものを脱ぎ捨てる）どうして、ペェア。あなた有名な人になったでしょう。あなたの名は万人の口にのっていてよ。あなたの肖像はどこの町、どこの廣場へも持ちまわられて、民衆はあなたを改革者として賛美しているわ。あなた満足して。

ペェア　そう。もう改革者はたくさんだ。

（「ストリンドベルグ集」舟木重信の訳による）

【学習の手引】

(1)この課を読んで、次のことについて考えさせられたことを書く。

偉人・世間の評判・新聞記事・ことの眞相・眞の改革者・人の表裏。

(2)一つ〳〵のことばが、生きたことばに読めるようにくふうする。

(3)本心からのことばと口の先だけのことばとを読み分ける。自分のくふうの要点をまとめる。

当用漢字表

部首	漢字
一部	一丁七丈三上下不且世
	丘丙
丨部	中
丶部	丸丹主
丿部	久乏乗
乙部	乙九乳乾乱(亂)
亅部	了事
二部	二互五井亜
亠部	亡交享京
人部	人仁今介仕他付代令以
	仰仲件任企伏伐休伯伴
	伸伺似但位低住佐何佛
	作佳使來例侍供依侮侯
	侵便係促俊俗保信修俳
	俵併(倂)倉個倍倒候借
	倣値倫仮(假)偉偏停健
	側偶傍傑備催傳債傷傾
	働像僚僞僧價儀億儉儒
	償優
儿部	元兄充兆先光克免児
入部	入内全両(兩)
八部	八公六共兵具典兼
冂部	冊再冒
冖部	冗冠
冫部	冬冷准凍凝
几部	凡
凵部	凶出
刀部	刀刃分切刈刊刑列初判
	別利到制刷券刺刻則削
	前剖剛剰副割創劇剤
	(劑)劍
力部	力功加劣助努効劾勅勇
	勉動勘務勝労(勞)募勢
	勤勲励(勵)勧(勸)
勹部	勺匁包
匕部	化北
匚部	匠
匸部	匹匿区(區)
十部	十千升午半卑卒卓協南
	博
卜部	占
卩部	印危却卵巻卸即
厂部	厘厚原
厶部	去参(參)
又部	又及友反叔取受
口部	口古句叫召可史右司各
	合吉同名后吏吐向君吟
	否含呈呉吸吹告周味呼
	命和咲哀品員哲唆唐唯
	唱商問啓善喚喜喪喫單
	嗣嘆器噴嚇厳嘱(囑)
囗部	四囚回因困固圏国囲
	(圍)園円(圓)図(圖)團
土部	土在地坂均坊坑坪垂型
	埋城域執培基堂堅堤堪
	報場塊塑塔塗境墓墜増
	墨堕(墮)墳墾壁壇圧
	(壓)塁壊
士部	士壮壱(壹)寿
夊部	夏
夕部	夕外多夜夢
大部	大天太夫央失奇奉奏契
	奔奥奪奨奮
女部	女奴好如妃妊妙妥妨妹
	妻姉始姓委姫姻姿威娘
	娯娠婆婚婦婿媒嫁嫡嬢
子部	子孔字存孝季孤孫学
	(學)
宀部	宅宇守安完宗官宙定宜
	客宣室宮宰害宴家容宿
	寂寄密富寒察寡寝実
	(實)寧審写(寫)寛寮宝

部首	漢字
	(寶)
寸部	寸寺封射将専尉尊尋対
	(對)導
小部	小少
尢部	就
尸部	尺尼尾尿局居届(屆)屈
	屋展層履属(屬)
山部	山岐岩岸峠峰島峡崇崩
	岳(嶽)
巛部	川州巡巣
工部	工左巧巨差
己部	己
巾部	市布帆希帝帥師席帳帯
	常帽幅幕幣
干部	干平年幸幹
幺部	幻幼幽幾
广部	床序底店府度座庫庭庶
	康庸廉廊廃(廢)廣廳
廴部	延廷建
廾部	弊
弋部	式
弓部	弓弔引弟弦弧弱張強弾
彡部	形彩彫彰影
彳部	役彼往征待律後徐径
	(徑)徒得従御復循微徴
	徳徹
心部	心必忌忍志忘忙忠快念
	怒怖思怠急性怪恒恐恥
	恨恩恭息悦悔悟患悲悼
	情惑惜恵悪惰悩(惱)想
	愁愉意愚愛感慎慈態慌
	慕惨(慘)慢慣慨慮慰慶
	憂憎憤憩憲憶憾懇応懲
	懐懸恋(戀)
戈部	成我戒戦戯
戸部	戸房所扇
手部	手才打扱扶批承技抄抑
	投抗折抱抵押抽払拍拒
	拓抜拘拙招拝括拷拾持
	指振捕捨掃授掌排掘掛
	採探接控推措描提揚換
	握掲揮援損揺捜搬携搾
	摘摩撤撮撲擁択(擇)撃
	操担(擔)拠(據)擦挙
	(擧)擬拡(擴)摂
支部	支
攴部	収改攻放政故叙教敏救
	敗敢散敬敵敷数(數)整
文部	文
斗部	斗料斜
斤部	斤斥新断(斷)
方部	方施旅旋族旗
无部	既
日部	日旨早旬昇明易昔星映
	春昨昭是時晩昼普景晴
	晶暇暑暖暗暫暮暴暦曇
	暁曜
曰部	曲更書替最会(會)
月部	月有服朕朗望朝期
木部	木未末本札朱机朽材村
	束杯東松板析林枚果枝
	枯架柄某染柔査柱柳校
	株核根格栽桃案桑梅條
	械棄棋棒森棺植業極栄
	(榮)構概樂楼(樓)標枢
	(樞)模様樹橋機横検桜
	欄権(權)
欠部	欠欲欺款歌欧(歐)歓
	(歡)
止部	止正歩武歳歴帰(歸)
歹部	死殉殊殖残(殘)
殳部	段殺殿殴(毆)
母部	母毎毒
比部	比
毛部	毛
氏部	氏民
气部	氣
水部	水氷永求汗汚江池決汽
	沈没沖河沸油治沼沿況
	泉泊泌法波泣注泰泳洋
	洗津活派流浦浪浮浴海
	浸消渉液涼淑涙淡浄深
	混清浅(淺)添減渡測港
	渇湖湯源準温溶滅滋滑
	滞滴満(滿)漁漂漆漏演
	漢漫漸潔潜(潛)潤潮渋
	澄沢(澤)激濁濃湿済
	(濟)濫浜(濱)滝(瀧)瀬

部首	漢字
	湾(灣)
火部	火灰災炊炎炭烈無焦然
	煮煙照煩熟熱燃燈焼営
	(營)燥爆炉(爐)
爪部	争爲爵
父部	父
片部	片版
牛部	牛牧物牲特犠(犧)
犬部	犬犯状狂狩狭猛猶獄独
	(獨)獲猟(獵)獣献(獻)
玄部	玄率
玉部	玉王珍珠班現球理琴環
	璽
甘部	甘
生部	生産
用部	用
田部	田由甲申男町界畑畔留
	畜畝略番画（畫）異当
	(當)畳
疋部	疎疑
疒部	疫疲疾病症痘痛痢痴療
	癖
癶部	登発(發)
白部	白百的皆皇
皮部	皮
皿部	盆益盛盗盟盡監盤
目部	目盲直相盾省看眞眠眼
	睡督瞬
矛部	矛
矢部	矢知短
石部	石砂砲破研(硏)硝硫硬
	碁砕碑確磁礁礎
示部	示社祈祉祕祖祝神祥票
	祭禁禍福禅礼(禮)
禾部	秀私秋科秒租秩移税程
	稚種称(稱)稲稿穀積穂
	穏(穩)穫
穴部	穴究空突窒窓窮窯窃
	(竊)
立部	立並(竝)章童端競
竹部	竹笑笛符第筆等筋筒答
	策箇算管箱節範築篤簡
	簿籍
米部	米粉粒粗粘粧粋精糖糧
糸部	系糾紀約紅紋納純紙級
	紛素紡索紫累細紳紹紺
	終組結絶絞絡給統糸
	(絲)絹経(經)緑維綱網
	綿緊緒線締縁編緩緯練
	縛縣縫縮縦総(總)績繁
	織繕絵(繪)繭繰継(繼)
	続(續)繊
缶部	欠(缺)
网部	罪置罰署罷
羊部	羊美着群義
羽部	羽翁翌習翼
老部	老考者
而部	耐
耒部	耕耗
耳部	耳聖聞声(聲)職聴
聿部	粛(肅)
肉部	肉肖肝肥肩肪肯育肺胃
	背胎胞胴胸能脂脅脈脚
	脱脹腐腕脳(腦)腰腸腹
	膚膜膨胆(膽)臓
臣部	臣臨
自部	自臭
至部	至致台(臺)
臼部	與興旧(舊)
舌部	舌舎舗
舛部	舞
舟部	舟航般舶船艇艦
艮部	良
色部	色
艸部	芋芝花芳芽苗若苦英茂
	茶草荒荷荘茎(莖)菊菌
	菓菜華万(萬)落葉著葬
	蒸蓄薄薦薪薰藏藝藥藩
虍部	虐処(處)虚虜虞号(號)
虫部	蚊融虫(蟲)蚕(蠶)蛮
	(蠻)
血部	血衆
行部	行術街衝衛衡
衣部	衣表衰衷袋被裁裂裏裕

	補装裸製複襲
襾部	西要覆
見部	見規視親覚（覺）覧観
	(觀)
角部	角解触(觸)
言部	言訂計討訓託記訟訪設
	許訴診詐詔評詞詠試詩
	詰話該詳誇誌認誓誕誘
	語誠誤説課調談請論諭
	諮諸諾謀謁謄謙講謝謡
	謹証(證)識譜警訳(譯)
	議護誉(譽)読(讀)変
	(變)譲
谷部	谷
豆部	豆豊(豐)
豕部	豚象豪予(豫)
貝部	貝貞負財貢貧貨販貫責
	貯弐(貳)貴買貸費貿賀
	賃賄資賊賓賜賞賠賢賣
	賦質頼購贈賛(贊)
赤部	赤赦
走部	走赴起超越趣
足部	足距跡路跳踊踏践(踐)
	躍
身部	身
車部	車軌軍軒軟軸較載軽
	(輕)輝輩輪輸轄轉
辛部	辛弁(辨瓣辯)辞(辭)
辰部	辱農
辵部	込迅迎近返迫迭述迷追
	退送逃逆透逐途通速造
	連逮週進逸遂遇遊運遍
	過道達違逓(遞)遠遣適
	遭遅(遲)遵遷選遺避還
	辺(邊)
邑部	邦邪邸郊郎郡部郭郵都
	郷
酉部	配酒酢酬酪酵酷酸酔醜
	医(醫)醸
釆部	釈(釋)
里部	里重野量
金部	金針鈍鈴鉛銀銃銅銑銘
	鋭鋼録錘錠銭(錢)錯錬
	鍛鎖鎮鏡鐘鉄(鐵)鑄鑑
	鉱(鑛)
長部	長
門部	門閉開閑間閣閥閲
	(關)
阜部	防阻附降限陛院陣除陪
	陰陳陵陶陥陸陽隆隊階
	隔際障隣随（隨）険隠
	(隱)
隶部	隷
隹部	隻雄雅集雇雌双(雙)雑
	離難
雨部	雨雪雲零雷電需震霜霧
	露霊(靈)
青部	青静
非部	非
面部	面
革部	革
音部	音韻響
頁部	頂項順預頒領頭題額顔
	願類顧顕
風部	風
飛部	飛飜
食部	食飢飲飯飼飽飾養餓余
	(餘)館
首部	首
香部	香
馬部	馬駐騎騰騒駆(驅)験驚
	駅(驛)
骨部	骨髄(髓)体(體)
高部	高
髟部	髪
鬥部	闘
鬼部	鬼魂魅魔
魚部	魚鮮鯨
鳥部	鳥鳴鶏
鹵部	塩(鹽)
鹿部	麗
麥部	麦(麥)
麻部	麻
黄部	黄
黑部	黒黙点(點)党(黨)
鼓部	鼓
鼻部	鼻
齊部	斉(齊)
齒部	歯(齒)齢(齡)

Approved by Ministry of Education

(Date Oct. 13, 1950)

教育文化研究会

会長 國立國会図書館館長 金森徳次郎

主幹 東京教育大学教授 石山脩平

國語科編集委員

東京教育大学附属中学校教諭 長谷川敏正

東京都立白鷗高等学校教諭 渡辺茂

成蹊大学教授 飛田隆

山梨大学教授 鳥山榛名

東京教育大学附属高等学校教諭 和田邦五郎

同 宮崎健三

お茶の水女子大学附属高等学校教諭 稲村テイ

東京都目黒区立第八中学校教諭 大村浜

一、出版権設定登録済
二、意匠登録出願中
三、無断轉載を禁ず

昭和二十四年一月二十五日 発行
昭和二十六年六月 一 日 三版印刷
昭和二十六年六月 五 日 三版発行

「國語」中学二年（二）
定價金二十三円五十銭

著作者 東京都新宿区市谷砂土原町一ノ二番地
教育文化研究会
代表者 金森徳次郎

発行者 東京都新宿区市谷砂土原町一ノ二番地
教育図書株式会社
代表者 小松謙助

印刷者 東京都新宿区市谷加賀町一ノ二番地
大日本印刷株式会社
代表者 佐久間長吉郎

発行所 東京都新宿区市谷砂土原町一ノ二番地
教育図書株式会社

教科書番号 中國 809 昭和 26 年度用

広島大学図書
0130449688